だいちゃんのだいぼうけんシリーズの９

～エッダ編～

～西風　そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

http://nisikaze.sakura.ne.jp

北欧の小さな町。
霧の深い石造りのこの町が、人間の住む場所にしては妙に居心地がよくて、だいちゃん、柿ただちゃん、風すっかの三人は、しばらく滞在していた。そんな町がたまにある。日本の武蔵村山とか新潟寺泊とか飛騨高山とか。
小さな町の割に、そこそこ蔵書のある図書館があって、だいちゃんは、やっと初めて、『イエスゲィ・バァトルの息子』の正体を知った。そしてその周辺の本にハマり込み、ずっと図書館通いをしている。
今やだいちゃんは、柿ただちゃんとマニアックトークが出来る程の歴史マニアとなっていた。
柿ただちゃんは、だいちゃんに付き合って、図書館で地元の郷土史や民話を読んだり、町外れの散策をしたり、適当に楽しんでいる。
風すっかは、図書館も散歩も性に合わなかった。それで、風袋のレストアやキャンプ道具の手入れをしていたが、それにも飽きて、町のメインストリートで風袋の最速チャレンジとかやりだした。
そして、あるクランクを曲がり損ねて飛び込んだ窓の中に、この物語の初めがあった。

＊＊＊

物凄い音に、母親が部屋に入って来た。
「どうしたの?!」
「何でもないよ、突風が吹いたの」
ベッドの上で、パジャマ姿の子供が、ぶっきらぼうに答えた。母親は散らばった本や模型や、外れた壁の世界地図を直しながら、随分な風ね、と呟く。
「もういいよ。あ、窓は閉めないで、もう出て行って、早く!」
その声に急き立てられ、母親は慣れた感じでハイハイとドアの向こうに退散した。
「…出て来ていいよ…」
風すっかが、本棚の奥から、押し込められた本を乗り越えて顔を出した。
「ボクが見えるの?」
ベッドに半身を起こした男の子は、当然、という顔をした。身体は小さいのに表情は大人びていて、幾つ位なのかよく分からない。
「その本、そこじゃないのに…」
「ふうん、じゃあ自分で片付ければ?」

子供は不機嫌な顔になっただけで、ベッドからは動かず、風すっかを睨んだ。
「歳、聞かないんだね」
「興味ない事は聞かない」
風すっかはやっと本の隙間から抜け出して、服のホコリを払った。
「僕の所に来る人は、みんな漏れなく第一声は、『ボク、幾つ?』だよ」
「あんたが分からない風貌だからさ。あんたに興味を持つ取っ掛かりなの。興味も持たないボクよりは良い相手だよ」
「だったら僕と話せばいいのに、必ず母さんが先に『今年で十一ですのよ、身体は小さめですけどね』って喋り出して」
「ふうん……」
「後は大人だけでずっと話して、僕の胸とかお腹とか、ちょちょっと調べて出て行くの」
「ふうん……」
「ねえ、幾つってそんなに大事な事? 僕との出会いの一番に来る程」
「あんたがこの世で何年生きたかって事だろ? あんたの事を判るのに一番シンプルな取っ掛かりだよ」
「何年生きたか…? 違うよ、あと何年生きられるかだよ」
「…?」
「どのお医者さんも『この子は大人になれないでしょう』って。ねえ、大人って、幾つからが大人?」
この子供が、大人が気軽に、幾つ? と聞くのを嫌悪するのが分かった。

「お医者や母親が、あんたの前でそんな会話をするの?」
風すっかは信じられない顔をした。
「一階でだよ。でもベッドに耳をつけていたら、聞こえるんだよ。不用心な人達」
「本当に不用心だな」
風すっかは棒読みで言って。風袋を広げた。
「まあ、じゃ、ボクは行くよ、頑張って長生きしろよ」
宣告されていなくたって、明日死ぬ子は死ぬ。このままいても、あまり楽しい会話は出来ないだろう。
「待って、待って」
「……」
「あの、…あのさ、…お菓子食べない? 甘いの、一杯あるの」
少年は枕元の棚を引っ掻き回した。

「……甘すぎなきゃ食べてやる」
どうせだいちゃんも柿だちゃんも図書館の閉まる時間まで帰って来ない。ここで、我が儘で素直じゃないガキンチョのお守りをしているのも、一興だ。

二階でチリチリ鈴の音がして、母親は階段を駆け上がる。あの子から呼ぶなんて珍しい、具合でも悪くなったんじゃ…。
「お茶が欲しい。『じんじゃあてぃー』ってある？　ポットでたっぷり持って来て。あとミルクと、うちで一番ちっちゃいカップ」
「え？　ええ…」
ジンジャーティーなんて…、また何か本で見て興味を持ったのかしら？　母親はいぶかしがりながらも、何も聞かずに階下へ降りて行った。何にしても、お茶が飲みたくなる程具合が良いならよかった。
「へえ～、君、本当に見えないんだね」
少年はテーブルの上の風すっかを眺めて、楽しそうに菓子箱を開けた。
「あんたさあ、どこの王子様か知んないけれど、人に物を頼むのは、もう少し丁寧にやりなよ」
「……なんでそんな事言うの？」
「聞いていて不快」
「分かった…、努力する」
我が儘坊主も、物を知らないだけで、言えばちゃんと聞いてくれるんだ。風すっかはこの少年を理解する事にした。
「ボクは風すっか、君の名前を教えてくれる？」
「僕、・・・ホズっていうの・・」

「誰か来ているの？」
母親が盆を持って入って来た。
「ノックしてよ！」
風すっかがホズを睨む。
「…いや、いいよ…、そこに置いて…下さい、…ありがとう…」
母親は狐に摘まれたような顔で部屋を見回す。
「誰もいないよ、本を朗読していたの」
「ああ、あまり疲れないようにね」
「余計な…、いや、うん、はい。…もう出て行って…下さい、…お茶、ありがとう…」
母親が首を傾げながら出て行って、少年はため息をつく。
「なかなかだよ、ホズ、なんだあ、ちゃんと出来るんじゃん」

風すっかはポットを傾けてお茶を注いだ。
「うん…まあね、僕だって、やろうと思えばそれなりにはね。ねぇ、それ、美味しいの？」
「飲んでみる？」

＊＊＊

ホズは、本当にちっちゃい頃から寝たり起きたりらしい。ちょっと何かあるとすぐ苦しくなって熱が出る。
弟がいるが、昼間は学校だし、放課後も遊びに行って夜まで帰らない。近所の親も気を使って、元気な子供をホズに近付けない。友達らしい友達もいなくて、本と壁の世界地図、天井のカモメの模型、それと少しの大人だけがホズの世界だった。
「ねえ風すっか、妖精なら願い事叶えてくれるの？」
「そんな趣味も力もないよ、病気を治すって、神サマでも出来ないんだぜ」
「病気を治すんじゃないよ。それは分かっている」
「…そ、そう？　まあ、出来る事なら聞いてやるよ、何？」
ホズは枕元の本を手に取った。他の本に比べて、その本だけ角がめくれてヨレヨレだ。お気に入りなんだろう。
「これ…」
その本は、この地方ではポピュラーな子供向けの北欧神話の全集だった。
パラパラめくると、中頃に見開きで挿し絵があった。目を閉じた痩せた青年が、離れた所にいる子供を弓で狙っている。子供の側には大勢の人がいてみな笑っており、青年の側には厳らしい顔をした老婆がいた。
「この弓を引いている神サマ…、この神サマもホズっていうの」
「へえ」
「ホズ神は生まれ付き目が見えないけれど、控え目めで優しいヒトなの。なのに、騙されて自分の弟を弓で射っちゃうの」
「それはそれは…」
「それで、死刑になっちゃうの。可哀想でしょ」
「まあね」
「ホズ神を助けて。この挿し絵だとまだ射っていないから」
「えっ？　…えーと…？」
風すっかはマジマジとホズを見た。お伽噺と現実をゴッチャにする程幼くはないし、夢見るタイプでもない。何かの比喩なのか？
ホズは少しの間風すっかを見つめて、満足気に口の両端を上

げた。
「やっぱり君は頭から馬鹿にしたりしないで真剣に考えてくれた。話してよかった！」
そう言って何だか一人合点して、風すっかを両手で包んでパジャマの懐に入れた。
「うわっ…うわわっ…、何を……？」
飛び出そうとするのを上から押さえられて、ホズの身体ともども、ぐるりと回るのが分かった。
本のページが激しく繰られるバララララッという音が輪転機みたい響いて、今度は身体が凄い勢いでどこかに飛ばされて行った。

＊＊＊

あぁぁーーーっと投げ出された所は、部屋の中でも町の石畳でもなく、柔らかい芝生の上だった。
ホズは？　…いない？　身体を起こすと、植え込みの間から、向こうに庭園が見えた。
「？？？？？？？」
さっき挿し絵で見た庭園…？　まさかまさか……。
遠くの正面に綺麗な子供が、沢山の大人に囲まれている。輝くような金髪で、その子の周りの空気まで明るくしている。
大人達は笑いながらその子に石や木の枝を投げ付けている。しかし、その子の光が石や枝を跳ね返すのだ。そしてまたみんな笑う。
風すっかは恐る恐る後ろを振り返った。そこには挿し絵の通り、弓に木の枝をつがえたヒトと、老婆がいた。
ただ、青年はさっきの絵より大分若くて、少年という感じだ。あの金髪の子供より二つ三つ上くらい？　兄と言っていたが、くすんだ灰色の髪に風貌も冴えず、兄弟には見えない。
老婆がすり寄るように、甘い声で言う。
「さあ、貴方もヴァルデル様に物をぶつけて、あの遊びの仲間に入れて貰うのです。弓で射つなんて、きっとみんなに大ウケしますよ」
何か、凄い世界観だ…。しかし、このいかにも胡散臭そうな老婆からホズ神を救えるのは、きっと自分だけだ！
風すっかは、呪文を唱えた。

ホズ神が若木の枝みたいな矢をつがえて、弓弦を引く。しかし、ヒュッと突風が吹き、弦が切れてしまった。いきなり手を弾かれて、目の見えない少年は、わっと悲鳴をあげた。

弦の切れた音とその悲鳴で、笑っていた人々がこちらを見た。
「ホズ様?」
「お前は!」
人々の中の、白っぽい銀髪の青年が何か唱えて、二本指をピシッと老婆に向けた。
光が飛んで来て老婆に当たりそうになったが、年寄りとは思えない動きで、背筋を伸ばして片手でそれを弾き飛ばした。そして、凄い眼で風すっかを睨み付け、ヒュイッと風を起こして姿を消した。

「ホズ様、これはいったい…?」
人々が駆け寄る。さっきの銀髪の青年が、弓から落ちた矢を拾い上げた。
「ヤドリギの新芽…」
「なんだって?」
「唯一、ヴァルデル様を傷付けない契約をしなかった、あのヤドリギか?」
「なんで、よりによって?」
銀髪の青年は、彫刻みたいな端整な顔立ちをしていたが、そんな人が怒りを滲ませると、逆に凄味がある。手の中の小さな枝を握り潰しながら、ギリギリと歯噛みしながら唸った。
「ロキ! あのヤロ〜…!」
ホズはオロオロしている。
「僕は、ただ、あのお婆さんに勧められて…、貴方も皆の仲間入り出来るよう、手助けしてあげましょうって…」
「分かっています! でも貴方は以前からあのならず者に目を付けられているのです! 気を付けて下さい!」
「フレイ様、お気持ちは分かりますが、ホズ様は大王のお子。口を慎まないと…」

「兄さま?」
さっきの金髪の子供がやっと来た。みんな駆けて来たのに、彼一人てくてく歩いて来たのだ。空気が読めないのか、呑気クンなのか、不思議ちゃんなのか?
「なんだ、兄さまも一緒に遊びたかったの? じゃあ行こうよ、ぼく、手を引いてあげる」
ヴァルデルと呼ばれるこの子供の声は、不思議な魅力に満ちている。姿も雰囲気も、周りの者を引き付ける。彼が来ただけで、何でも許せるなごやかな気持ちになっちゃうのだ。大の大人が群がるのも、少しは分かる。

フレイと呼ばれた銀髪の怒れる青年も、彼の出現で顔が緩みまくっている。
「さあ、行こうよ、兄さま」
ヴァルデルは兄の手を引き、いきなり駆け出した。
「あっ…！」
風すっかは声を上げた。いくら手を引いていても、目の見えない相手にそれはないだろう。案の定、ホズは足元を取られて転んだ。
「あーあー…兄さま、そんなんじゃぼくたちと一緒には遊べないね。そこに座って声だけ聞いていたら？」
この綺麗なほがらかな子供が言うのでなければ、凍り付くセリフだ。風すっかは唖然とした。まわりの大人達は、彼の中身と外見の違和感に、まったく気付いていないようだ。
やがてみんな、ホズがそこにいないかのように、ヴァルデルを中心に去って行った。最後に残ったフレイだけが、ホズに声をかける。
「頼みましたよ、これからは注意して下さい」
地面に膝を着いてぼうっとしているホズに、風すっかが話しかけた。
「なんて連中だ…」
「誰？」
「ボクは風すっか。風の妖精だけれど、今のヒト達には見えないみたい。見る気になれば見えるヒト達だと思うけれどね」
風すっかはポンとホズの手の上に乗った。
「小さいんだね」
「まあね」
「でも、力はあるよね。さっき弓弦(ゆづる)を切って助けてくれたの、君？」
「……あんた、あの連中より、よっぽど眼が開いてんな！」

＊＊＊

風すっかは噴水で布を濡らして、ホズの擦りむいた膝を拭ってやった。
「いっつも、あんなんなの？」
「え？」
「あんたの弟」
「……」
「天然というには、始末が悪すぎるよ」
ホズは、ちょっと止まって、それからゆっくり聞いた。

「あの、君って、アースガルズの者じゃないの？」
「『あーすがるず』っていうのか…ここ。うん、ボクちょっと遠くから来たんだ」
　ホズはゆっくりなまま、話し出した。
「生まれた時から光の神子で、存在するだけで周りを幸せに出来る…って、どんな気分だと思う？」
「……」
「きっと、この先も一生…、何の気遣いも思いやりも…、努力なんて言葉も、なくていいんだ、ヴァルデルは」
「まあ、そうかもな」
「僕一人、ヴァルデルを見る事が出来ないから、幸せになれない。それが、唯一彼の勘に障る事」
「兄弟なんだろ、親はなんつってんの？」
「両親が、世界で一番、ヴァルデル・ラヴかな。母上が、綺麗な息子を愛するあまり、世界中のありとあらゆる物に、彼を傷付けないよう頼んで回ったんだ。物霊達もヴァルデルが好きだから、喜んで承知したのさ」
「……究極の親バカだな」
　さっき、矢の代りにつがえていたヤドリギだけは、小さいから大丈夫だろうと、頼みに寄らなかったらしい。

「あの凄い眼の婆さん、ロキ…だっけ？　あれは何者？」
「ロキ…、なんであんな酷い事、するんだろう。もし、ヴァルデルに何かあったら…」
　ホズは自分の肩を抱いて身震いした。
　ロキはひねくれ者の嫌われ者で、皆の嫌がる事をするのが生き甲斐…、らしい。でも、賢くて魔法の力が強くて、なかなかシッポを掴ませない。
「ふうん、…だいたい、分かった」
　どうやら、さっきの事件を防ぐだけじゃ、ホズを救う事にはならないようだ。

「ねえ、ボク、連れとはぐれちゃったんだ。知らない？　ヴァルデルぐらいの背で…、君と同じホズって名前」
「……？」
「知らないか…」
「うん、でも、僕は確かに狩猟の神だけれど、目の見えない神の名前を自分の子供に付ける親って、いるのかなあ？」
「…ああ…」
　何だか分からない事だらけだけれど、このちょっぴり歪んだ世界から脱出する為のキーワードは、やっぱり『ホズ神を救う』、

だろうな。個人的にも、この頼りない神サマをちょっと何とかしてやりたい。
それには、ロキをやっつけなきゃいけないのか。
いっぺんぐらい図書館に行っておくんだった。柿ただちゃんなら北欧神話も守備範囲だろうし、世界観にも精通していて、ロキの弱点の一つも知っているだろうに。
風すっかは考え込んだ。元の世界でも、あの町では北欧神話は身近だったはず。日本の桃太郎くらい。じゃあ、騙されて死刑になった不幸な神さまの名前なんて、子供につけるだろうか？
そういえば、あの母親は彼の名前を呼ばなかった。あの子は自分とホズ神を重ね合わせているんじゃないのか？
「ホズ…！」
風すっかはホズ神に顔を近付けて目を覗き込んだ。一つの賭けだ。
「ホズ…！　もし、聞こえるんなら、ボクの友達を呼んで来て。ボクが君の部屋に置いて来た風袋があるだろ？　あれを窓の外の見える所にぶら下げて置くんだ。きっと見つけてくれる。友達の力が必要だ！」
ホズ神は不思議な顔をしたが、不意に頭の先っぽからシュルンと何か抜けたような感じがした。
「何？　僕？　え？」
やっぱり、君、そこにいたのか……。

＊＊＊

その庭園は、大きな神殿の中庭だった。柔らかい芝生が覆い、綺麗な若木や花が美しく配置されていたが、何か違和感がある。
「ああ…、そうか」
風すっかは気付いた。
枯れ草がないのだ。折れて傷んだ草や、寿命を終えた葉っぱ、萎れた花、散った後の花弁などがない。完璧な『今』だけの庭。
「嘘っぽい感じ…」
目を上げると、遥か遠くに一本の木が見える。手前にある丘や林の感じからすると、かなりな遠くにある筈なのに、枝葉が空を覆う程に広がっている。無茶苦茶な大きさだ。
「神殿の僕の部屋に来る？　乾菓子くらい出せるよ」
目の見えない神サマが立ち上がって、太陽の位置で方向を探っている。
「うん…、ねえ、遠くに凄くおっきい木があるんだけれど、あれ、何の木？」

「君、世界樹を知らないの？　どんだけ遠くから来たの？」
「世界樹？」
「うん、世界樹、ユグドラシル。この世の礎(いしずえ)になる、大元の木。枝を張って天を支え、黄泉に根を穿(うが)ち、九つの世界を繋ぐ。すべての命は世界樹から生まれ、世界樹に還る…、知らないの？」
「知らない。ボクの元いた世界では無い…か、あっても見えていないか…、あっ」
　ホズ神と歩きながら風すっかは思い出した。
「すべての風の生まれる山ならあるよ。この世界を周回する二匹の龍がいる」
「へえ～、凄いね。行ってみたいなあ、世界の色んな所」
「そうだね、来られるといいね……」
　風すっかは自信なく返事した。この目の見えないちょっと虐げられ気味の神サマに、ここではない別の世界を体験させてあげたいけれど、彼と自分の世界を共有出来るかは、怪しい。
「僕、世界樹の麓すら行った事がないんだ」
「ふうん、行ってみる？」
　この世界での願いなら、何とかしてあげられそうだ。
「ふふ…、庭から部屋へ帰るのもやっとの僕が？」
「うん、ボクがサポートするよ、ちょっと練習してみよっか？」
　風すっかは、ホズの肩に跳んだ。
　二人は建物沿いに庭を一周してみる事にした。
「一歩先に段差…、その先は石畳…右に壁…、頭の高さに枝」
　最低限の事しか言わない風すっかのナビはなかなか優秀だった。これなら知らない道でも歩けそうだと、ホズも自信が出て来た。
「前、十歩くらいの所に小さな木……ヤドリギ…？」
　いつの間にか裏庭に来ていた。ガランとした灰色の庭の真ん中に、膝の高さ位の幼木がポツンとあった。てっぺんに真新しい折れ跡がある。
「これ、さっきの枝？」
　風すっかの問いに、ホズは屈んでヤドリギに触れた。
「ああ、乱暴に引きちぎられて怖がっている。可哀想に。こんなに幼くて弱いから、母上もわざわざ頼みに来なかったのに」
　ヤドリギはホズに撫でられて、嬉しそうにサワサワと震えた。
「矢にして弓で射つなんて、どうしてそんな酷い事に知恵が回るんだろう」
　風すっかは気になっていた事を聞いた。

「こんな細い枝で射っても大したことにはならなかったと思うけれど。あのフレイってヒトは何をあんなに怒っていたんだろう？」
「僕はこれでも狩猟神だから、僕の手がつがえた矢は、百発百中で相手の急所を射抜くんだ」
「……」
それで目が見えないんなら、ロキでなくとも悪い奴に利用されそうだ。フレイが厳しく言いたい気持ちも分かる。
「でも、ヴァルデルの光は僕より格上だから、跳ね返す筈なんだ。このヤドリギでなければ」
「その…、世の中の物が何も自分を傷付けないなんて、…それは、その子にとって良いことなんだろうか…？」

＊＊＊

その日、城内でホズ神とすれ違った者達は、いつもうつ向き気味でおぼつかない足取りの(当たり前なのだが)神サマが、顔を上げてサカサカ歩いていたのに、振り向いて首を傾げた。本当に風すっかは誰にも見えないようだ。よっぽどみんな眼を閉じているのか？
いや、この世界に来て一人だけ目が合ったっけ……ロキだ。
一度部屋に戻り、背嚢(はいのう)に葡萄酒と乾菓子を詰めた。滅多に手にしない外出用の杖を持って部屋を出ると、廊下の角でヴァルデルに会った。まだ取り巻きがくっ付いている。
「あら、兄さま？」
「ああ、ヴァルデル、先程はすまなかった」
「どこか、行くの？　まさかね？」
「少しね」
「供は連れなくていいの？」
「一人で大丈夫」
黙って見送るヴァルデルを後目に、ホズは廊下をスイスイと曲がって行った。

城外に出ると道は平坦ではなかったが、つまづきそうになると、風すっかが風を起こしてホズの身体を支えた。おかげでホズは、今までにないくらい、思い切り歩く事が出来た。
「僕、こんなに一人で知らない道をぐんぐん歩いたの初めてだよ。お陽様の光もいつもより全然明るい感じがする」
「そう、それはよかった……」
風すっかの返事はちょっと上の空だった。世界樹は大きく見えるが、まったく近付いて来ない。

「どうしたの？　風すっか」
「うん、ごめん…。行ってみる？　って気軽に言っちゃったけれど、思ったより遠いみたい」
「どのくらいかかりそうなの？」
「想像もつかないくらい。大きく見えるから行けると思ったけれど、手前にある物をよく見ると、随分小さい…」
「ふうん…」
「ごめんね…」
「いいよ、行こう」
「え？」
「行き着かなくてもいいよ。ただ世界樹を目指して歩く…、それでいいんだ。夕方になったら引き換えそう」
「それでいいの？」
「出来れば、幹に触ってみたかったけれど。でも世界樹に少しづつでも近付いていると思いながら歩くのも、わくわくして楽しいよ。これは目が見えないならではかな？」
　ホズは風すっかの方を向いて笑った。
　風すっかは、柿ただちゃんがチョモランマの山頂を目指したのを思い出した。だからすぐホズの気持ちも理解した。
「そうだね、行こう」

それから、風すっかは、柿だちゃんが世界一高い山に挑んだいきさつを話した。ホズは本当に楽しそうに驚いたり、相づちをうったりした。
「その子達が風すっかの友達？　さっき、僕の中にいた誰かに呼びに行くように頼んでいた」
「うん、ホズとウマが合うかもしれないね」

夕方、小高い丘の上で木の下に腰掛けて、葡萄酒を飲んで菓子を割って分けた。
「光が夕陽のオレンジになった。もう帰らなきゃね…」
木がさわさわ鳴った。
「なに？　どうしたの？」
ホズが木の幹に触れて立ち上がる。
さあっと風が立って、いつの間にか、若い女性が立っていた。身体の線ピッチピチのローブを着ていて、あからさまに艶っぽい。
しかし、ホズは、先程の、お婆さん…！　と言って立ち上がった。葡萄酒の瓶が倒れて転がる。
「ちっ！　これだから、盲(めしい)は！」
女の人は一瞬、墨みたいに真っ黒になって、次に鋭い目の男に変わった。
「心の目は誤魔化せやしない。やっかいだねぇ！」
風すっかはホズの前に飛んで身構えた。
「ロキ…！」

＊＊＊

ロキは変装の名人だという。皆の目撃証言が違って、どれが本当のロキか分からない。
今、目の前にいるのは、赤っぽい金髪が背中にかかった、背の高い細身の男だ。見た感じ若いのに、薄青の目だけは落ち窪んで鋭く、百年も生きているような貫禄がある。いや、神ならもっと生きているか。
「ふ…うん…。そっちの坊やは風の眷族かい？」
やっぱり、彼には風すっかが見えている。
「そうだよ、あんたも風使いかい？」
ロキは鼻で笑って肩をすくめた。
「風使いだって？」
「ホズに近寄るな！」
風すっかが言い終わる前に、男は右腕を振り上げた。たちまちゴオゴオと丘一杯に炎の帯が渦巻いた。

「火の神・ロキ様を知らないとは、どこの田舎モンだ！　風なんざ、火の僕(しもべ)だ！」
そこん所は風すっかのプライドに触れた。
「何だと！」
しかしここで風の魔法を使うと、炎を煽ってしまう。癪だけれど、風と火の関係ってそうなのだ。
かくなる上は……！　風すっかは転がった葡萄酒の瓶に飛び乗った。
「行っけぇぇーーーっっっ」
瓶は助走なしのいきなり最高速でロキに向けて飛んだ。避ける間もなく、みぞおちに瓶を喰らって、ロキは腹を抱えて転がった。
「ぐふうぅ……てめぇえ……」
敵を捜すと、風すっかも瓶と一緒にロキの腹に激突して、全身打撲で痙攣しながらうずくまっている。
「自爆技かよ、何考えてんだ」
「風を…馬鹿に…されて…、引き下がれるかぁ！」
「……」
ホズが突っ立ったまま、所在なく言う。
「とにかく一度この炎を鎮めて下さい。ロキおじさん」
「オジサンゆーな！」
ロキはまだ腹を押さえながら、何とか半身起こして、指をパチンと鳴らした。炎は一瞬で治まった。
「ふん、お前にはコケ脅しも効かんな」
「ちょっと暖かい程度でしたよ。たいした炎は起こしていないんでしょう。音だけは大袈裟だったけれど」
「ふんふん、やっぱ、お前はいいねぇ。ボンクラ揃いのアースガルズで、唯一ちゃんと物が見られる」
火の神は一度ゴロンと仰向けになってから、よっこらしょ…、と身を起こした。
「そのお気に入りを陥れようとしたんだ！　あんたは！」
風すっかもケホケホむせながら起き上がった。
「危機意識の欠如した馬鹿兄貴と、能天気な阿呆神どもの目を覚ましてやろうとしただけさ。勿論こいつは後で助ける予定だった」
「どーだか？」
少年ホズの話では、ホズ神は死刑になったはずだ。
「危機意識って…？」

ホズが真剣な顔で聞いた。
「お子ちゃまは心配しなくていい」
「ホズは無関係だとでもっ？　巻き込もうとしたくせにっ！」
火の神は、少年と風の精を交互に見てから、肩をすくめた。
「まあ、そうだな、お前には知る権利があるか。平たく言えば、戦争が起こる。今度は大きい、最終戦争(ラグナロク)だ。ヨトゥンヘイムやムスペルヘイムの巨人どもも、ヴァン神族の生き残りも、虎視眈々と準備をしているのに。馬鹿兄貴はまあ、戦士は集めているが、人間の亡霊を充(あ)てにしているようじゃ、どーにもならん。お子ちゃまの機嫌を取って喜んでいるような阿呆神どもは、剣の持ち方すら忘れている」
「……」
聞いておいて風すっかは、ほとんど分からなくて目を白黒しているが、ホズは真っ青になっている。
「心配すんな、お前らお子ちゃまは、ラグナロク後の事を考えていればいい。戦争は大人に任しとけ」
ロキは風すっかに向き直った。
「たいした魔法だな」
「…え？」
「たいした魔法だって言ったんだ、特攻野郎。この俺様が避ける間もないとはな。風使いの……」
「風すっか、新潟の小さい風すっか。名前はまだない、半人前だから」
「なんだそりゃ」
ロキは顔をしかめながら笑った。
「あんな凶暴な魔法が使えて半人前？」
「あれは…、彗星の魔法は、正式じゃない。ボクと兄ちゃんが考え出して、邪道だから、大人に内緒なんだ。一度発動すると、曲がれないし、何かにぶつかるまで止まれない」
火の神は腹を抱えて大笑いした。
「ふふ、ははは っ、サイコーだぜ、ベイビー！　…まあ、鼻血ふけよ」
笑いながら、自分の首に巻いていたショールを突き出した。風すっかは、鼻血を垂らした間抜け顔だったのに気付いて焦った。
何だかロキはイメージと違った。ひねくれているかどうかはともかく、人の不幸を喜ぶタイプじゃないような？
風すっかは自分の感覚を信じる事にした。

＊＊＊

「ロキおじさん」

「だから、オジサンゆーな！」

「ヴァルデルを死なすつもりだったんですか？　それと戦争と、何か意味があるんですか？」

「ああ、能天気な阿呆神どもの目を覚ますには、アースガルズから太陽の光をなくす位の事はやんないとな」

「……」

「あの不死身小僧をどうにかするには、あの方法しかなかったんだが…。お前にはちょっとすまなかったな」

ロキは肩をすくめたが、本当にすまないと思っているかどうか分からない、他人事のような言い方だった。

「僕はともかく、ヴァルデルは死なねばならないような悪事をした訳じゃないでしょう」

「太陽の神子として生まれ、恩恵を受けて育ったんなら、いつかその負の部分も背負う事になる。生まれながらにえこひいきされている奴って、実はそんなにいないんだぜ」

「……」

「心配すんな。最終戦争(ラグナロク)後にはまた、この世にヴァルデルが必要になるから、冥界(ニーブルヘイム)のヘルにはちゃんと生き返らせて戻すよう、話は通してある」

「あの〜〜……」

風すっかが鼻を押さえながら片手を挙げた。

「えーと…、今の話の感じだと…、この世界では、死んでも潰しが効くんですかぁ？」

二人はおかしな顔をした。

「通常は死んだらそれまでだ、諦める」

「はあ…」

「俺に限ってはそうでもない」

「はあ？」

「冥界の長、ヘルは俺の娘だ。愛しいパパンの言う事なら、何でも聞いてくれる」

「はぁあ？」

「例外はある、戦死者は行き先が違うから駄目だ。天寿を全うした者も別枠。ヘルが融通出来るのは、寿命途中で不本意に命を落とし、冥界行きになった者だけだ」

ああ…、やっぱり、ちょっとでも図書館に行っとくべきだった…。この世界観に着いて行けるかしら・・・。

「ところで」

ロキは草を払って立ち上がった。山にかかる夕陽に照らされて、火の神の金髪が燃えているように見える。
「珍しいな、神殿を抜け出すなんて。何か、目的があったのか？」
「ああ……」
ホズは困った。今の大人の話の後で、子供っぽい話は喋りにくい。
「ボク達、世界樹の側に行こうとしたんだ」
代わりに風すっかが答えた。
「へえ？」
「理由とかなくて、ただ行って、幹に触れてみたかっただけ。でも、ホズが行ってみたい所に行くって、凄く意義のある事だと思ったんだ」
鼻で笑われるかな…と思ったけれど、意外にもロキは真面目な顔で、ホズと風すっかを見比べた。
「この世界の大元に触れてみたい…か。良い発想だ」
ロキは指を輪にしてくわえて、口笛を吹いた。しかし音が出ない。
「……？」
「あの…、僕、行けない距離なのは分かっていたんです。もう引き返そうかと…、ロキ…？」
「勿体ない事ゆーな」
ロキはうっとりとした表情で、空を眺める。
「お前は自分で出来る所まで頑張って歩いた。後半は楽をしても良かろう」

茜雲に黒い点が浮かび、みるみる大きくなる。あっと言う間に大きくなった黒い影を見て、風すっかは飛び上がった。
馬…！　空飛ぶ馬を見るのは初めてじゃない…けど！　八本足の馬なんて反則だ！
風すっかの声を聞いて、ホズの方は凍りついた。
「ス…スネイフニル？　父上の…?!」
「馬鹿兄貴にくれてやった馬だが、俺様の呼び出しは優先する」
え…？　ロキの馬鹿兄貴がホズの父上？　だからさっきからおじさんって…。つーか、嫌われ者のロキが、大王の弟？
……風すっかは観念した。もう深く考えるのはやめて、何でも素直に受け入れよう……。
「父上のお気に入りの馬なのに、ロキおじさんの呼び掛けを優先するなんて」
「だって、しょーがないだろ、こいつ、俺の息子だもん」
「へ？」

風すっかは、脳みそから何かが剥がれ落ちるような感覚がした。
「馬……の、父親なの？　…あんた」
「いんや、母親。牝馬に化けてこいつの父馬を誘惑した」
う・け・い・れ・られるかぁぁ～～～！

＊＊＊

父王の馬だが、ホズはスネイフニルに乗るのは初めてだという。
「ヴァルデルは一度乗っけて貰っているんだけれどね」
その時は、馬の機嫌が悪くて、随分怖い思いをしたらしい。
「ああ、あれ、俺の命令」
ロキがしれっと言って手綱を取った。ホズをヒョイと引っ張り上げて前に乗せ、その肩に風すっかが座った。
「ユグドラシルまであっという間さ」
スネイフニルは八本の足で豪快に地を蹴って舞い上がった。
「あの…、ロキ…」
「なんだ？」
「今まで、催事の時とかに見かけても、話をしようと思いませんでした。僕、噂を鵜呑みにしていて…、反省しています。自分で逢って、聞いて感じるまで、物事を知っていると思っちゃイケないんだって」
「…噂ってどんな…？」
「……」
風すっかが代わって答えた。
「ひねくれ者で、人の嫌がる事をするのが生き甲斐」
「いや、正解だぞ…、ははは！」
ロキは愉快そうに笑ったが、ホズは首を振った。
「ひねくれてもいないし、生き甲斐は別の所にあると思います」
「・・・何でそう思う？」
「声がまっすぐ胸に入ってきます。鐘を打つように」
ロキはちょっと困った顔をした。
小賢しい大人を相手にするより、真っ直ぐな子供を相手にする方が百万倍苦手…、って感じで、肩を竦めた。
「まあ、さっきのあれも正解だ。自分で見聞きして感じるまで、真実を知った気になっちゃいかんってやつ」
「はい」
ホズは素直に話を切った。
「俺はお前を見ていたぞ」

「…え…」
「話せて嬉しい。やっぱりお前を…」
スネイフニルが急降下した。地上に虹の橋がかかり、いつの間にかユグドラシルが眼前だ。

横に張り出した枝が空を隠し、一本の木なのに、大きな森みたいだ。その鬱蒼(うっそう)とした根元に降り立った。
さっきの話の続きが気になったが、その心を押し退けるように、ホズの中に強いざわめきが入り込んで来た。まだ触れてもいないのに、このエネルギーの流れはどうだ！
「凄い…！　凄いや…！」
ホズは膝まづいて、太い根に両手を当てた。
「うわあっ！」
少年は弾かれたように尻餅をつき、肩の風すっかも、危うく振り落とされそうになった。
「九つの世界を繋ぐユグドラシルの流れを感じたんだ。深追いするな、戻って来られなくなるぞ」
「は…はい…」
ロキは根の林を乗り越え、長く張り出した枝を掴んで、リズムをつけて小刻みに揺すった。

上の梢から凄い早さで何かが降りて来る。枝を伝ってロキの鼻先に来たそれは、小さな金毛のリスだった。せわしなく前肢と口を動かして、何かを話している。
「ふうん……」
ロキは無表情に話を聞いていた。二人がいるので、わざと無表情なのかもしれない。
「ご苦労さん、またな」
ひとしきり話して、リスは木の裏側に走って行った。
「ラタトスクだ、世界樹を伝って九つの世界を往き来する。この世界一番の情報通。誰にも組せず、下手な思惑を持たないから、情報に偏りがない。主観がないから正確」
ホズが根をくぐりながら、四つ這いでロキの側に近付いた。
「何でも知っているんですね、貴方は」
「誰でも知っている事だ。ラタトスクだって、聞かれれば、誰にだって教えてくれる。ただ、直接ここまで足を運び、奴と話をしようと思うのは、俺と、兄貴と、ごく一部のマシな神だけだ」

＊＊＊

「あらぁ、じゃあ、ワタシは、少しはマシなのかしら？」

木の葉のざわめきに溶け込む、鈴虫のような声がした。
もう何が出ても驚かないぞ！と、そちらを向いた風すっかは、心の準備が出来ていたのに、アゴが外れた。
高い枝に腰掛けたその女性(ヒト)は、教会のテンペラ画から抜け出したような、清楚可憐風美女だったが……。
周囲に二頭の牡鹿がはべり、…まあ…その…いろいろ、えーと、いろいろ……楽しそうにやっていた。
あっ、どっかで見た事ある！　と思ったら、さっきのフレイと呼ばれた青年と瓜二つだ。
「あいつが化けてんの？　えーと、…フレイ？」
「風すっか、フレイヤはフレイと双子の兄妹なの」
女性の声を聞いてから、ホズは急に明るい顔になっていた。
少年が近寄る間に、女神はとっとと牡鹿を追っ払った。牡鹿達は名残惜しそうに離れて、枝を跳んで樹上へ姿を消す。
「あぁら、お久し振りね、大王ン所の小鹿ちゃん。貴方、ちゃんとワタシを正面から見てくれるから、好きよぉ」
「フレイヤの光はお陽様と一緒に、感じる事が出来るから…」
ホズはちょっと頬を染めて言った。見えないって幸せな場合もあるんだなぁ…。
「うふふふ…」
フレイヤはふわりと枝から飛び降りて、ホズの正面に立った。
「あらら」
女神は風すっかに気付いた。
「こんな所に可愛い小鳥ちゃんがいるわ」
「ボク、小鳥ちゃんじゃない！」
「うふふふふ♪」
フレイヤは風すっかを両手で包み込むようにして、顔を近付けた。青くて深い瞳に吸い込まれ…そう……だ…。
「フレイヤ！」
ロキの声に引き戻された。
「子供にまで手を出すんじゃない！　この××××が！」
「あらあ…」
耳を覆いたくなる下品な言葉だが、フレイヤには誉め言葉らしい。

＊＊＊

フレイヤは愛だの美だのの象徴の女神って事だ。ギリシア神話のヴィーナスみたいなもんか。
でも何だか裸足だし、衣服の裾はボロボロだし、お上品なイメージとは違う。ヴァルデルのように降り注ぐ陽光って感じで

はなく、世界樹の鬱蒼とした根元の僅かな木漏れ日のような、しっくりとした美しさだった。
「虹の橋(ビフレスト)を渡って来たのか?」
「まさか!」
フレイヤはちょっと鼻根にシワを寄せた。
二人の神は、下を向いて苦笑いをした。何か、このヒト達だけのツボのがあるみたいだ。

結構な距離の根の林をくぐって、世界樹の幹にたどり着いた。正面に立つと、幹の端っこが見えない。まるで壁だ。
「ほれ、ご希望の世界樹の根幹だ、触れてみろ」
ホズは心細そうにためらった。
「大丈夫だ、引っ張られそうになったら俺が助けてやる。世界を感じてみろ」
フレイヤが横で、あらあ…頼もしい事…、と茶化すのを無視して、ロキはしっかりホズを見据えていた。
「ちびっこ、お前はこっちに来てな」
「風すっかだってば…」
風すっかはホズの肩から離れたが、ロキの横でフレイヤが手を差し伸べていて…、大いに葛藤した挙句、ロキの肩に腰掛けた。
「あらぁ…」
フレイヤは残念そうに、ピンクの唇から舌をちょろっと出した。

ホズは背中を世界樹にピタリと着けて、両手も当ててみた。
「うわあ…!」
見えない彼の身体中が視覚になって、光が、手や背中から、入っては駆け抜けて行った。それは力強かったり、暖かかったり、眩しかったり、ゆっくりうねっていたり…。
「気持ちいい……」
風すっかがロキに尋ねた。
「ボクにも出来る?」
「多分、ホズならではだ」
ロキもホズと同じくらい恍惚とした表情だ。それをちらりと見たフレイヤの瞳が、一瞬冷たい光を帯びた。
「貴方のお眼鏡に叶ったのかしら?」
「そうだな…、おっと!」
ロキは駆け寄って、ホズを幹から引き離した。
「そこまでにしときな、これ以上は、もう少し、大人になって

からだ」
ホズはまだぼうっとしている。
「凄いね…、世界樹って…」
「ああ、だが、ここまで来ても、それが解らん奴には解らん」
また根の林をくぐって、スネイフニルの所まで戻ると、もう夜だった。少し離れた所から、フレイヤが自分の銀の馬を引いてきた。
「ホズ、小雀ちゃん、貴方達、この馬でお帰りなさい」
「こすずめ……」
風すっかはもう、このヒトに対しては突っ込む気にもならなかった。
「君はどうする?」
「あらぁ、貴方が、送ってくれるんだわ…」
ワタシに虹の橋を渡らせる気? と絡むフレイヤに、また下を向いてククッと笑ってから、ロキは、ホズを銀の馬に押し上げた。
「放って置けば神殿の中庭に降りるわ。後は放してやれば、勝手に私の所に帰って来るから」
フレイヤは呑気な声で言ったが、すぐ後、ホズの手を握って、声音を切り替えた。
「それと、馬鹿兄を許してね。単純なだけなの、あのヒト」
ホズはまた頬を赤らめて、いえ、はい…と答えた。
ふふん、と鼻を鳴らしたロキに向いて、礼を言おうとしたら、またフレイヤに遮られた。
「ホズ、貴方、ロキに逢った事、黙っていなさいね。誰にも言ってはダメよ。あと、世界樹で体験した事も」
「…? 僕、みんなに言おうと思っていたのに。ロキ、本当は優しくて面倒見の良いヒトだって。父上にも…」
フレイヤとロキが顔を見合わせて嘆息したのを、風すっかだけは見ていた。
「ロキ…?」
「ああ、フレイヤの言う通りだ。黙っていろ。俺とアース神の間は、そんな単純じゃない」
「戦争の事も?」
「人づてに言うことじゃない。分かるな?」
「はい…、でもロキ、また、いろいろ教えてくれる?」
ロキはそれには応えず、銀の馬の尻を叩いた。

上空高く舞い上がる銀の馬の上で、目の見えない少年は、しがみつきながら、多分一生懸命、礼を叫んでいるんだろう。
二人のアース神は青い影を落としてそれを見つめていた。
「良い子ね……」
「ああ……」
「哀しいわ……」
「ああ……」

＊＊＊

銀の馬の上で、ホズは黙り込んでいた。
「ねえ…、ねえ、ホズってば…」
何度か呼び掛けて、やっとホズは反応した。
「あっ…ごめん、…何？　風すっか」
「いや、世界樹に触った時の事、聞こうと思ったんだけれど…。何か考え事中だった？」
「…うん…」
「フレイヤの事？」
「うん、それも…」
「……ロキの事？」
「…うん…」

「ホズ、ロキは、噂とは違って、ちゃんとした人だと思う、…でも…」
「でも?」
「あの人の賢さが、ボクは怖い」
「……」
「ホズ、ロキの為に何かしようなんて思わないで。あのヒト、一度は君を陥れようとしたんだ」
考え事を見透かされて、ホズはちょっと苦い顔をした。

銀の馬は程なく神殿に着いた。建物は夜闇に沈んでいたが、馬は迷う事なく、中庭に降り立った。
二人を降ろすと、銀の馬はすぐ星の空に消えた。
「何だか、変だ?」
ホズが呟いた。
「え…?」
「寝静まっている時間じゃないのに、静かすぎる。静かなのに空気がざわついていて、禍々しい」

＊＊＊

「禍々しいのはお前だ!」

不意に幾つもの松明が掲げられ、中庭が煌々と照らされた。大勢の武器を持った男が、ホズを取り囲んでいる。
その後ろには、ヴァルデルを伴ったフレイがいる。
「昼間あんな事があった後に出掛けて、変だと思ったんだ。尾行させたら案の定、丘の上でロキと会っていた」
松明に照らされたフレイは、高揚した顔で叫んだ。
「ヴァルデル様、この者はロキと通じていたんです!」
「兄さま、本当なの?」

万事休す…? 何を言っても信じて貰えない雰囲気だ。このまま打ち殺されかねない程、殺気立っている。
しかし連中に風すっかは見えていない。突破口はあるはずだ。
「ホズ、ボクが竜巻を起こして松明を消す。チャンスが出来る筈だから、何とか走って」
「うん、…ねぇ、噴水はどっち?」
「右、五十メートル」
「じゃあ、そっちに走る。・・頼んだ!」
ホズが身を低くすると同時に、風すっかは渾身の竜巻を起こした。一瞬で松明が消え、殆どの者がなぎ倒された。
一拍置いてホズが走る。風すっかは右手の風でホズを包み、

左手の風で進行方向の物やヒトを吹っ飛ばした。
混乱の末、ホズは噴水の縁にたどり着く事に成功した。縁の手触りで、ホズの頭には一瞬で庭の立体地図が浮かぶ。
「風すっか！」
「ほいさ！」
「あっちだ！　彗星の魔法で、この方向に僕を飛ばして！」
「分かった、丸くなって頭を守って！」
真っ暗闇の中、今はホズの方が宛になる。
「行っけぇっ！」
膝を抱えたホズにしがみ付いて、地面すれすれにスッ飛んだ先は植込みだった。
二人は上手に、植込みの一番深い場所に飛び込めた。大人達は、遥か彼方の中庭で、まだザワザワやっている。
「逃げ切れそうだ。ホズ、とっととこんな所おさらばしようぜ」
しかし、植え込みから立ち上がったホズは、迷う事なく一点に向けて歩いている。
「…？…ここは…？」
昼間一緒に来た、裏庭？
「ホズ…！」
ホズの向かった先には、小さい穴ぼこがあるだけだった。
あんな事があった後だ。当然ヤドリギは引き抜かれ、燃されでもしたんだろう。
「可哀想な事をする…」
ホズは膝まづいて、穴ぼこに指を突っ込んだ。
「ホズ！」
狩猟神は小さな根の欠片を摘まみ出した。
「これだけあれば…」
「ホズーー!!」
カづくで止めようとした風すっかを、誰かの両手が包んだ。
振り向くと、険しい薄青の瞳があった。
「ロ…キ…？」
ホズは腰の弓を外して、根のカケラをつがえる。彼方、中庭の人混みに、ホズにだけ見える光がある。
「ホズ!!」
風すっかより先に、ロキが叫んだ。弓を構えたホズが止まる。
「いいんだな…」
ホズは後ろ向きのまま頷いた。
音もなくホズが放ったカケラは、彼方で悲劇を起こしていた。程なく、中庭から大勢が駆けて来る。

ロキは風すっかを離して飛び上がった。
「ホズも連れて逃げてよ」
「それじゃあ意味がない」
「助ける予定だったって言ったじゃない」
「今じゃないんだ…」
ロキは闇に溶けた。
「そんなぁ……」
両膝を地面に付けて崩折れているホズに、大人達の乱暴な手が掴み掛かろうとした。途端、銀の馬が遮った。
「この子はロキに利用されただけです！　手荒は許しません、裁きは大王に！」
長い銀髪を振り乱して馬から飛び降りたフレイヤが、ホズを抱きかかえた。
「小芝居が巧いねぇ、女神サマ…」
上空で軽口を叩くロキの顔は、しかし、笑っていなかった。

＊＊＊

世界中が嘆きに覆われていた。動物も植物も鉱物も、針刺しの針一本までが、嘆き悲しんでいる。
ヴァルデルの母フリッグが、この世のありとあらゆる者に、息子の為に泣いてくれるよう、頼んで回っているのだ。
冥界(ニーブルヘイム)に逝ってしまった者の返還をヘルに懇願する事は、勿論ロキ意外の者にだって思い至る。ヘルがフリッグに出した条件は、九つの世界のありとあらゆる者が光の神子の為に涙を流すのなら、融通しましょう…、というものだった。
光の神子がいなくては陽も昇らない。あまりヴァルデルを知らない者だって、ここは泣いておくだろう。
そういうの全て、ロキには折り込み済みだと、フレイヤは言う。
神殿の窓から湿っぽい外を眺めながら、風すっかはフレイヤに尋ねた。
「でも…、ヴァルデルが戻ったら、ホズは特赦になって死罪を免れるって事にならない？」
フレイヤは青白い顔を横に降って、目を閉じた。
「それでは、ホズのやってくれた事が無駄になるのよ」
「……」
ホズには既に判決が下っている。幽閉された牢には大王の施錠が掛かっていて、風すっかにも近寄れない。

あの夜、ロキが去った後、ホズを助けようともがく風すっかを、今度はフレイヤが抑えた。
「フレイヤは、どうしてロキをそんなに信用するの？」
外界の嘆き声が急に大きくなった。たった一人、ヴァルデルの為に泣くのを断った巨人族の老婆がいたのだ。
これにより、世界が闇に覆われる事が確定した。最終的にロキの化けた老婆が現れるのを、ヘルは知っていた。初めからデキレースだったのだ。

「貴方は、どうしてロキを信用出来ないの？」
フレイヤは、空が嘆いて降り始めた雨を眺めながら言った。
「当たり前だろ！　自分では手を汚さないで、ホズを使ったり、変装した姿でしか行動しない。それに…、冷たすぎるよ！」
「それでも、何もしないで傍観している者達よりはマトモなのよ。ワタシみたいに…」
風すっかは窓辺を離れて、部屋の出口に向かった。
「ホズの所には入れないわよ」
「風は水が苦手なの！」
むしゃくしゃした気分を抱えて、ホズのいる所に入り込む道を求めて、神殿を探索した。
ラグナロク後の世界にヴァルデルが必要なのを思い至るロキが、今、ホズが誰かを必要としているとは気が付かないのだろうか?!
天井沿いにウロウロ飛んでいるうちに、今まで入れなかった扉が開いているのにも気付かず、迷い込んでしまった。
不意に、背中を摘まれた。
「わ…わあっ！」
小さい風の妖精を掴んだ手は、ノミで刻んだような深い眉間の前にそれを運んで、マジマジと覗き込む。灰色の眼は隻眼だった。その射すくめるような瞳には、しっかり風すっかが映っていた。
しまった！　ボクを見られるヒトが他にいたって不思議じゃないのに、油断し過ぎだ、ボクのバカ！
「風の眷族か。小ささの割に力があるな…。ホズが逃げる時、手助けしたのはロキだと報告を受けていたが…、ボンクラどもめ！」
隻眼の老人は、険しい眉を更に吊り上げ、風すっかを掴んだまま、机のベルを鳴らした。
時間がない！　誰か来る前に、この権力のありそうなオッサ

ンを説得しなくては！
　風すっかは、図書館に行っていなくて、本当に本当に良かった。でないと、この隻眼の老人がどんなに恐ろしいヒトか、分かっていたら、口もきけなかった筈だ。
「ボク…、ボク、ホズの側に行きたいだけなんです！」
「そして逃がす算段をするのか？」
「違うよ。ボクは逃がしたい…、けど、ホズは承知しないと思う」
「では、無意味だ」
「でも、側にいたいの！　明日か明後日か、おっきい刀で首をはねられちゃうんでしょう？」
「それで？」
「ボクが側にいて…、怖いの、ちょっとでも柔げられたら…」
「ではお前も共に刑を受けるか？」
「え…？」
「本来ならそれでもおかしくないのだ、お前はあやつに加担していたのだから」
「……」
「死に逝く者に、生きられる者が寄り添って、何の慰めになる？　見逃してやる、行け！　小者よ」
　兵士が風すっかと入れ違いに入って来た。
　背中越しに、何だか理不尽に怒られてるのが聞こえて、風すっかは涙をボロボロこぼしながら廊下を飛んでいた。
「うわあ！　雨漏りかあ？」
　叫ぶフレイの声が、意識の遠くに聞こえた。
　自分だって、ロキや、こいつらと何ら変わりないんだ。大切なヒトの役に立てなくて、ただ傍観しているだけ。
　決心した。
「フレイヤ、紙とペン貸して！」
　部屋に飛び込んで来るなり、蒼白な風の妖精が叫んで、フレイヤはいぶかしがりながらも、羊皮紙と羽ペンを揃えてくれた。
「ボクの友達が後から来るかもしれないから…、そしたら渡してくれる？　彼等と、ボクの兄ちゃんに」
「…貴方、何を…？」
「ロキの邪魔はしないから！」
　風すっかは、殴り書きした紙をフレイヤに押し付けて、部屋を飛び出した。
　文字は日本語で書かれていたので、勿論フレイヤには読めない。初めて見る漢字を眺めて、女神はほぅっと呟いた。
「強い、カタチ、だわ……」

＊＊＊

風すっかはさっきの道を引き返して、部屋に入った。隻眼の老人はまだいてくれた。机の上の二羽のカラスと何やら話をしている。

天井から急降下して、机のベルをリンと鳴らす。

「何だ、まだおったのか…」

カラス達が風すっかを睨むが、主人の反応を伺っている。

「ボクも、ホズと一緒に、刑を受ける！」

「……」

「さあ、早くホズに逢わせて！」

ベルの音に反応して兵士が飛んで来た。今度はめっちゃ早い。老人は、兵士を促して、窓辺の金の鳥かごを運んで来させた。蓋を開けるとカナリヤが飛び出したが、たちまちカラスに捕まり、バラバラに喰われてしまった。兵士は唖然と見ている。

老人に、開いている片眼で合図され、風すっかは、身体を固くして鳥かごに滑り込んだ。

老人は蓋を閉め、南京錠を取り付けて術をかけた。

「アレが好きだった『小鳥』だ。牢へ運び、刑場へも同道させ、埋葬する時、共に埋めてやるがいい」

兵士は空の鳥かごを渡され戸惑ったが、逆らわず、仰々しく捧げ持って部屋を出た。

これで……やっと……ホズに……逢える……。なんだか、あの隻眼の老人と渡り合うのは、物凄くエネルギーが要った。風すっかは鳥かごの底に、ぐったりと貼り付いていた。

「あーあ…生き埋めかよお……」

大王から鍵を預かる鍵番が扉を開け、石牢に鳥かごが運び込まれた。

何もないゴツゴツした石の床に横たわっていた影が、起き上がる。

兵士と鍵番が行ってしまってから、風すっかは声を出した。

「……ホズ…？」

「？？　風すっかなの？！」

声が弾んだ。牢は真っ暗だったが、ホズには関係ない。真っ直ぐ鳥かごまで這って来た。

扉の覗き穴から漏れる僅かな明かりに浮かぶ少年は、やつれていたが、思いの他しっかりしていた。

「これ…？　鳥かご？」

「…んと、交渉したんだ。鍵の掛かった鳥かごに入っていれば、

ホズといても良いって」
本当の事は言えない。
「本当？　良くそんなお許しを取れたね…。ごめんね、ありがとう…。それで、やっぱりごめんね…」
「何を？」
「一生懸命僕を逃がそうとしてくれたのに、僕、勝手な事をして…」
「ホズが、信じた事なら、それでいいよ。だから謝るな。謝ったら台なしだ」
「うん…」
ホズは網の隙間から指を差し入れた。風すっかの両手がそれを握る。たったそれだけしか触れていないのに、暖かみが身体中に染み渡った。
風すっかが鳥かごの持ち主の話をすると、ホズは座ったまま飛び上がった。
「風すっか、父上と、渡り合ったの？　大王と！　オーディン神と！」
さすがの風すっかも、アース神の頭領、雷神オーディンの名前だけは知っていた。
「…よく、八つ裂きにされなかったね…」

ホズはひとカケラの冗談も含まない表情で、両手で鳥かごを抱いた。

風すっかはロキは嫌いだけれど、彼の計画が分からない内は、邪魔しちゃいけないという気持ちだけはあった。だから、今は黙って待つ事にした。

「ホズ…さ、何でそんなにロキを信用出来るの？」

一度陥れられかけたのに、再度、彼の計画に添うたのだ。しかも見捨てられた。

「ああ、…何でかな？　世界樹が教えてくれた、って言ったら、信じる？」

「へ…？」

「世界樹が喋る訳じゃないよ。あの時、世界樹の幹の側で、世界の流れの中に、ロキが、何の澱みもなく、流れの方向に向いて立っている…、って感じたんだ」

「……」

「変…？」

「君がそう思うんなら、きっとそうなんだ」

ロキは、ホズを助けるのは今じゃないと言った。では、いつ助けるつもりなんだろう？

それから二人は、沈黙を埋めるように取り止めなく喋った。ホズが言うには、たまにフレイヤの唄が聴こえて来るらしい。

「その唄を聴いていると、怖さを忘れて安らかに眠れたんだ」

風すっかは、夜更けにフレイヤがろうそくを灯して、一心に手を組んで、何か術を唱えていたのを思い出した。

時間は分からないけど、随分たったような気がした。

喋り疲れて、何でここにいるのか忘れかけた頃、重い扉がガタリと開いて、天井に支えそうな大男が入って来た。

「何て事しでかしたんだ。ホズや…」

「…トール！」

＊＊＊

アースのトール…、神殿を探索していた時、彼の名前はやたらと耳にした。

トールがいたらロキの好きにさせなかったのに、とか、トールのハンマーでロキの頭を砕いて貰おう、とか。

赤毛の大男は、仁王さまみたいな顔をしていたが、ホズを見た途端、子供みたいに表情を崩し、丸太ン棒みたいな腕でガシッと抱きしめてきた。

「俺がしばらく振りに東国から戻ったら、何て事になっとるんだ！　あのバカヤローが、お前を利用しやがった！　目の見えねぇお前を！　分かってる…、分かっているが…、オーディンの裁きはくつがえらねぇ…。せめて、俺がお前を刑場まで送ってやる。俺の身体でお前を隠して、バカ者どもの目に曝させん」

ホズもトールの肘に手をかけた。

「トール、ごめんなさい…」

多分、ホズにとって、数少ない自分を大切にしてくれた大人だったんだろう。

大男は少年から身体を離して、小さい両肩を掴んだ。

「だが、敵(かたき)はとったぞ、アイツは報いを受けた」

「え…？　アイツって？」

ホズは表情を固くした。

「勿論、ロキの野郎だ」

トールは吐き捨てるように言った。

「昨日、アースの神々が集まった所に、奴が現れた」

「…それ…で？」

「奴の証言次第で、お前の刑が軽くなるんではと、俺は少しは望みを持っていたんだが…」

かごの中の風すっかも身を起こした。

「奴め、開き直って無茶苦茶をやりおった」

「やったって…何を？」

「ホズをそそのかしたのも自分だし、泣くのを拒んだ老婆も自分だとぶちまけた上で、いきなり逆ギレした。オーディンやアース神一人一人の過去の恥を暴き立て、侮辱したんだ」

「…ロキが？」

風すっかの知っている冷静沈着で穏やかなロキからは想像着かない。

「仲の良かった筈のフレイヤにまで酷い事を言った。××××なんて、あの女神フレイヤに。泣いとったぞ、可哀想に…」

「……」

「それでオーディンが怒り心頭に達して、逃げようとする奴に、雷を喰らわした」

「……」

「すまんな、お前の情状酌量を頼むどころの状況じゃなかった」

「それで、ロキは、どうなったんですか！」

「ああ？　奴は毒蛇の穴だ。大岩に縛り付けられ、したたる蛇の毒を受けている」

「!!!!!!!!!!」
風すっかも、かごの中で弾け起きた。
「トール…！」
ホズ…、今更何を言っても無駄だよ。ロキは何かをしくじったんだ…。

「トール、…僕は、これから、刑場に、行くんだよね」
「ああ、可哀想だが…」
「じゃあ、行こうよ」
ホズは鳥かごを携え、立ち上がってすたすたと戸口に向かった。
「お、おい…？」
廊下に出ると兵士が同道を申し出たが、トールは恐ろしい顔で、儂一人で充分、と遮った。
「ねえ、トール、お願いがあるの」
「叶えれる事は限られているが、…なんだ？」
「高い所からユグドラシルが見たい」
「見る…？　お前がか？」
牢のあった建物の螺旋階段を登ると、小さな屋上があった。
「世界樹は彼処だが…。見えるのか？」

「力の流れが見える」
ホズは床に空の鳥かごを置いて屈み込み、両手を添えて、独り言のように呟いた。
「父上が…、大王が、罪人にタダで小鳥なんて届けてくれる訳がない。小鳥は何を代償にしたの？」
トールはいぶかしんだが、後少しで刑場に行く少年の、好きに喋らせていた。
「罰はみんな僕が受ける。死罪以上の罰なんて、どうせないんだから」
目の見えないこの子は、牢獄の中で、空想の小鳥を話し相手にしていたのか？　トールは哀れさが込み上げてきて、鼻を鳴らした。
「世界樹は総てを知っている。例えばラタトスクの友達は何処にいるか。鳥かごを彗星に」
ホズは鳥かごを置いたまま踵を返して、茫然と立ち尽くしているトールの所に戻った。
「ありがとう、トール。じゃあ、行きましょう」
「もういいのか？　鳥かごは置いて行っても良いのか？　おまじないか？」
それには応えず、少年はもう一度鳥かごを振り向いて、凛と

言った。
「僕に弟への贖罪の機会を捨てろと？　ここで、真っ直ぐ償わないで、ニーブルヘイムでどの面下げて彼に逢える？」
そして、今度こそ、トールに肩を抱かれて、階段に消えた。
「僕は小鳥が大好きだよ。本当に逢えて良かった」
二人が去っても、鳥かごは暫くそのままだったが、昼間の流れ星が空を滑り落ちた時、ひとりでにゴロンと転がって淡く光ると、世界樹に向けてヒュウと飛んで行った。

＊＊＊

「こっち来んなよ……。めちゃ…カッコわりぃから……」
真っ暗闇の中、しわがれた声が微かに聞こえた。湿っぽくて、据えた臭いが満ちて、そして凍るように寒い。
「よくここが分かったな……」
「世界樹が教えてくれた。ボクでも木の声が聞けたよ。ホズが助けてくれたのかもしれない」
「ホズ…あいつは？」
「刑場に行ったよ、あんたのお望み通り」
「……そうか」
しばらく沈黙があった。
「で、何しに来た…」
暗闇の中、歯噛みする音が響いた。
「ホズの望みじゃなきゃ来るもんか！　自分よりあんたを助けろって。あんだけ説得したのに！　あんだけ…！」
風すっかが足踏みして、鳥かごがガチャガチャいった。
「賑やかだな、一人じゃないのか？」
「隻眼のオッサンに鳥かごに入れられたんだ。どんだけネチっこい術なんだ。彗星の魔法で二回も激突したのにビクともしない」
「はは…、そりゃネチこい……。ちょっとこっち来い」
「いいのか？」
「しゃーないだろ、あのオッサンのネチこい術が解けンのは俺様ぐらいだ」
風すっかは、岩に鳥かごをガンガンぶつけながら、苦労して声の方に飛んだ。
「……」
「あんま、見んな……」
火の神のあんまりな様相に、彼をあまり好いてなかった風すっかでも、胸が潰れた。

「どれ、ああ、ネチこい魔法だ……」
ロキは、僅かに自由になる手を鳥かごの鍵に添えたが、その手が蛇の毒が流れた形に骨が見えているのが分かった。
程なく鍵はカチャリと外れた。
「…ありがと……」
「ホズに言え」
「……ロキ、ボク、この戒めを切れると思う」
「やめとけ、ネチこいオッサンの怒りを買うぞ」
「いいよ、どうせ、もう約束破りをしているんだ」
「……何をやった?」
「ホズに逢わせて貰う代わりに、一緒に刑を受けるはずだった」
ロキが、暗闇でどんな顔しているか分からなかったが、声音が少し穏やかになった。
「…気にすんな、あのオッサン独特の性格の悪い言いがかりだ」
「ロキ…さ、大王の事、あんま尊重していないよね。でも自分は大王の刑を素直に受けんの?」
「はっは…、俺様が自力でここを抜け出せないとでも? 俺はな、スキでここにいんだよ!」
「まさか、ホズへの贖罪でここにいるの?」
「お前に、そう思って貰えて嬉…しい…ぜ…」
蛇の毒が滴る音がして、ロキの声が途切れた。
「ロキ、ホズはあんたが苦しむ事なんか望んでいないよ。ボク、この戒めを解くよ」
「触んなよ!」
ロキの声が険を帯び、冷たい手が風すっかを押しやった。
「俺の息子の腸だ! 傷つけるな!」
「……・・・・!」
ロキを大岩に縛り付けているのが、ただの縄でない何か変なモノなのには気付いてた。アースってどんだけ残酷なんだ。
「俺はそんな殊勝じゃない。分かるだろ。俺は…、…ここで、待っているんだ」
「?…誰を? 何を?」
「馬鹿兄貴さ。奴がここへ来て、俺様の力が必要になったと頭を下げに来る…の…を…」
また、酷い臭いがして、毒の滴り流れ落ちる気配がした。
「バカはあんただよ。なに? そのプライド!」
「ほっとけ、今の俺からプライド引いたら何が残る!」
風すっかは呆然と浮かんでいた。ホズといい、目の前の火の神といい、アース神族の血管には血の代わりにプライドが流れてんのか?

「噂をすれば…、だ……」
いきなり光が差し、洞穴の天辺の穴に、二羽のカラスを伴ったシルエットが現れた。
「ホントに……キタ……」
「お前さん、岩の隙間を伝って、オッサンに見つかんないよう外に出ろ、…それから…」
「…？」
「帰れるんなら、すぐにお前の世界へ帰れ、直にこの世界は戦火に包まれる」
「ラグナロク？」
「ああ、八つの世界、逃げ場なく」
「八つ？」
「ニーブルヘイムだけは別だ。汚れた地は誰も欲しがらない」
「…！！！!!」
「ほら、早く行け！」
風すっかは迫り来る老人の足元をすり抜けて、外へ飛んだ。
火の神は上目で隻眼の老人を激しく睨む。
「最後の、仕上げだ…」

＊＊＊

ぐったりした表情の、小さい風の妖精に、女神は葡萄酒を注ぐ。
スネイフニルの鞍に掛かっていたつば広帽を彗星にして飛んで来たという話に、苦笑いしながらそれを窓から投げた。太陽のなくなった灰色の空をくるくる回り、帽子はじき見えなくなった。勝手に持ち主の所へ戻るらしい。
窓から見える庭園は、最初見た時と違い、花は枯れ果て、生きている植物なんていないみたいだ。
フレイヤの後ろには、さっきまで儀式をしていた燭台が並ぶ。処刑台の少年が最後まで安らかでいられるよう、女神の唄を送ってたという。
ホズは救えなかったし、ホズに頼まれたロキにも助けを拒まれた。自分は一体何をしにこの世界に来たんだろう？
押し黙った風すっかに何も聞かず、フレイヤはおもむろに部屋の隅へ歩いて行き、真鍮の箱に手を掛けた。この間までなかった物だ。
「今のアース神はみな殺気立って、ギラギラしているわ。太陽がなくなって、危機感が出たんでしょうね。この間までの腑抜けた状態とは天地の差ね」

箱を開けると、見事な銀細工の鎧と武具が納まっていた。
「トールも呼び戻されたし、今なら、いきなり巨人族の襲撃があっても対処出来る。神サマがその気になっているんだからね」
女神はつらつらと喋りながら、銀の装具を一つ一つ引っ張り出して並べた。最後に紅い包みをほどくと、ルビーの柄のついた細身の剣だった。
「フレイヤも戦場に行くの？」
「あらぁ…、これでも、戦神でもあるのよぉ」
剣を抜いて、左右に傾け、その光を眺めながらピンクの唇で呟く。
「アース神は一人残らず戦場へ行くわ。そして、どれだけ生き残れるか、分からない」
「ニーブルヘイムにいる者を除いて…？」
フレイヤは振り向いてニッコリ笑った。
「そうよ、だって、あそこのヒトは、みんなもう死んじゃっているんだもの」
風すっかは、目を真ん丸に開いて、フレイヤを見据えたままグラスを引き寄せ、ゴクリと音をさせて葡萄酒を一口飲んだ。
フレイヤは剣を置き、窓辺に近付く。遠くユグドラシルだけは、灰色の世界なんて関係なしに、青々と繁っている。
愛しげに世界樹に視線を据えながら、小さく息を吐き、……そして、やっと、教えてくれた。
「ラグナロク後の世界に、本当に必要なのは、ホズなのよ」
ヴァルデルは光の神子として必要だが、ただの木偶（でく）だ。本当に必要なのは、そのヴァルデルを含め、世界の流れを読み、皆を導く事の出来る…、誰も気付いていないけれど、真に、『生まれた時からえこひいきされていた者』…ホズ神なのだと。だから、ラグナロクの間の安全な地、一時ヘルの元に預けるのだと。
「名誉の戦死を遂げた者は、ニーブルヘイムなんて汚れた地へは行かないらしいわ。でもね、この世界で死を覆せるのは、ただ一人、ヘルだけなの」
この腐った身体で生まれたロキの娘は、生まれてすぐに、オーディンにニーブルヘイムへ追いやられたという。
ロキはただ一人ヘルを大切に扱い、ニーブルヘイムの長にまで育て上げた。だからロキの言う事はまず聞くし、客人も丁重に扱うだろうと。
「みんな、折り込み済みなんだ、まるで、神サマ気取りだね」

まあ、神サマなんだけれど…。
「貴方に打ち明けると…、貴方、優しいから、ホズに言ってしまうでしょう?」
「言うよ！　ホズの心はズタズタだ。弟殺しになって、見捨てられて、死刑囚になって…！」
「それではね、いけないの…。新世界の神になるなら、その前に弟殺しの罪は償わなければならなかったの」
「……」
「本当に素晴らしい子だわ。強くて、真っ直ぐで。傷もみんな乗り越えて、行ってしまった」
フレイヤは相変わらず遠くの大木を見やっているが、その眼はもっと遥か彼方を見ているようだった。
「ワタシは、彼の身体の痛みを和らげる事くらいしか出来なかった。けど、貴方は心の痛みを和らげに行ったのね」
風すっかはうつ向いて盃の影に隠れた。
「貴方も本当に素晴らしい子だわ…」
「ボク…、この世界で生きるなら、フレイヤと戦場へ行って、あんたを守ろうかな。ラグナロク後まで生き残れるように。そしたらホズ、喜ぶよ」
「うふふ、有り難う。でも、帰れる場所があるのなら、帰った方がいいわ」
「帰り方が分からないんだ」
ロキも帰れと言ったけれど、一体どうやったら帰れるのか、見当もつかない。
「そうね…」
女神は額に指を当てて考えた。
「世界樹…が、知っているかもしれない…」
「でも、世界樹の繋ぐ九つの世界に、ボクの居た世界はないよ」
「九つって、私達が言っているだけだもの。もしかして、私達の知らない世界もあるのかも。ラタトスクに聞いてごらんなさい」
不意に、神殿内に喚声が上がった。鐘が打ち鳴らされ、大勢の足音が響く。
部屋に伝令が訪れ、巨人の地(ヨトゥンヘイム)で動きがあったので、出陣し、配置に着くようにと伝えて、慌ただしく去った。
「間に合ったわね」
フレイヤは素早く鎧を身に付ける。

「ロキが行動を起こさなければ、何の心構えもなく、この時を迎えねばならなかった。『アレ』が、ロキのワタシ達への置き土産だと、気付くヒトはいないだろうけれど…」
アレ…とは、アース神一人一人を侮辱し、眠りこけていた闘争心を叩き起こした事…か。
肩当てを付けて、髪をかき上げながらフレイヤは、風すっかに最初で最後のおねだりをした。
「ね、前に貴方がお友達に書いた手紙…。あれワタシ、貰ってもいい?」

外が一段と騒がしくなり、亡霊戦士(エインヘリャル)が集結し、隊を組む。オーディンがこの日の為に集めていた、アース神を護衛する為に存在する、戦死した人間の英雄達だ。大王が欲して、故意に戦死させた者もいるという。
「フレイヤ…」
「さあ、行きなさい。今なら、世界樹の辺りはまだ平穏だわ」
「フレイヤ…、ボク…」
女神は剣を腰にさし、そしてゆっくり近付いて、両手で風すっかを包み込み、ほっぺにキスをした。
「小さいけれど、大きな心を持った風の精、…ワタシ、貴方、好きよ…」
フレイヤは白銀の髪をなびかせて、戦場へ降りて行った。

＊＊＊

風すっかは葡萄酒の盃を横倒しにして跨がり、世界樹に向けて一直線に飛んだ。
眼下に女神フレイヤが亡霊戦士(エインヘリャル)を引き連れて、荒野を駆けるのが見える。彼女はオーディンに…ではなく、『自分がアース神である事』に忠実なのだ。
余所見していたら、いきなり何かにぶち当たった。
「わあ?!」
オーディンの所の二羽のカラス！　ヨトゥンヘイムからの情報を持って来たのは彼等だろう。
鳥かごから逃げた獲物は、彼等のエサだ。盃と一緒にクルクル落ちる小さい風の精を、鋭い爪が狙う。

――ボフン！――

風すっかにまた何かぶつかった。今度は懐かしい感触だ。
「風袋…?!」
そして、風袋を操るのは勿論、柿ただちゃんだ！

柿ただちゃんは風すっかの手をしっかり握って風袋に引っ張り上げ、ニパッと笑って、すぐさまカラスの方を向き直った。
そして、風袋の上に仁王立ちになり、二羽のカラスをビッと指差した。
「知ってるっ?!」
カラス達は一瞬止まる。
「今年の夏は、ミティアムボーダー柄が流行るのよ!」
「???」
風すっかは目が点になったが、カラス達も止まっている。
「知ってる? コーラにラムネを入れると爆発するって。知ってる? 世界一鼻の長いのは象だけれど、世界一鼻の穴の長いのは鯨なのよ!」
風すっかは目を白黒させたが、二羽のカラスが物に取り憑かれたように真剣に聴き、慌てて飛び去ったのにもびっくりした。
今のどーでもいい豆知識に、どんなおまじないが?
柿ただちゃんは風袋に座り直して舵を世界樹に向けた。
「間に合って良かったわ」
「あの…、今の…?」
「ああ、フギンとムニンは、知恵を欲するオーディンに、世界中の知識を集めて伝えるのが、最優先任務なの」
「……」
「初めて聞く知識は、何を置いてもオーディンに教えに行くわ」
「……」
風すっかは二羽のカラスが大真面目に、今年の流行りの柄だの鯨の鼻の穴だのの話を主（あるじ）に伝えるのを想像した。
ロキでなくとも愛想が尽きるかもしれない……。
「おお〜い…」
懐かしいだいちゃんの声がする。柿ただちゃんより大分遅れて、フラフラ空を飛んで来る。
何かと思えば、ホズの部屋にあった大きなカモメの模型に金の鈴を付けて、その背に青い顔をしてしがみついている。
無理しなくていいのに…。
三人はそのまま世界樹まで飛んだ。中頃の枝に降り立つ。
「だいちゃん…! 柿ただちゃん…!」
二人の顔を見たら、風すっかは、抑えていたものが堰を切って溢れた。
「何してたんだよおぉぉー!! 待ってたんだよおぉぉーー!!」

泣きべそを隠しもしないで、大粒の涙をぼろぼろこぼす。
「この世界、ボクにはシビア過ぎるよぉ……」
柿ただちゃんは風袋を離して、一足跳びに風すっかを抱きしめた。
「ごめんなさい…。一刻も早く来たかったんだけれど…」
「こっちも大変だったんだ、ホズが…」
だいちゃんも困った顔で、風すっかを覗き込んだ。
「ホズが?」
「危篤だったんだ。最初の夜からずっと」
「えっ!」
「あ、もう大丈夫よ。だから私達、こうして来られたの」

だいちゃんと柿ただちゃんは、『向こうの世界』であったあらましを話してくれた。
最初の日、風すっかが夜更けても帰らないのに心配した二人は、町を捜索し、ホズの家の窓際に吊るされた風袋を発見した。
部屋に入り込み事情を聞いて、また本を開いた所で、急にホズの様子がおかしくなった。
「ダメだよ! ホズ、…射っちゃダメ!」
そう叫んでうつ伏せに倒れて、それから意識が混濁して何日も危ない状態だった。
「…こっちのホズが弟を死なせてしまってから、死罪を宣告されて牢に入っていた間だ…」
二人はずっと彼の部屋にいた。そして、つい先日、やっと意識が戻って、ホズは嬉しそうに呟いた。
「小鳥が来てくれた! 僕、見捨てられていなかった!」
母親は夢の続きを見ていると思ったらしい。
「……」

「私達、すぐ風すっかの所に行きたかったわ。でも、まだ予断の許されないホズに、無茶はさせられなかったの。それでね、別方面からホズの回復の手助けをする事にしたの」
「別方面から手助け?」
人間に治せない病気のホズに、どんな手助けが出来るんだろう?
「まず、ホズ神の事をちゃんと教えるべきだと思ったの」
「へ…?」
「だって、あの子の持っていたのは、まったく子供向けの、童話としての北欧神話の本だったのよ。本当の『エッダ』は、もっと複雑で難解な叙事詩の集まりなの。キリスト教に弾圧され

ていたゲルマンの人々が、比喩的表現の詩にして、口伝えで自分達の信仰する神サマを残そうとしたモノだから、謎の部分や矛盾点も多くて…」
「あー……えーと……」
「平たく言うと、ちゃんと読んだら、ホズ神はただの虐められっ子の可哀想な神サマじゃなかったって事さ」
だいちゃんが助け船を出した。だいちゃんも、エッダは、読もうとして断念したクチだ。

＊＊＊

「で、図書館からエッダの現代語訳を借りて来て…、あ、勿論、図書カードを作ってちゃんと借りたのよ、彼の名前で。ちなみに、彼の本名はホズじゃないわ、どうでもいいけれど。係りのオジサンはカウンターの向こうなんか見ないでハンコを押してくれたから、簡単だった。それで、彼に読ませたの」
「大丈夫なの？　病気なのに、そんな難解な本を読んで」
「彼に関しては、本をめくる度に回復して行ったわ」
「……」
「本当だよ、可哀想でたまらなかったホズ神が、実はラグナロク後の重要な神サマで、ヴァルデルや他の神とも対等に渡り合っていたとか知ったら、元気が出てね、…ゲンキンだね」
「それだけ、ホズ神の事、思い詰めていたのよ。自分に重ね合わせる部分も多かったんだと思う。何でかしら、この世界に来られるようになったのも、そういった所からでしょうね。でも、ホズ神の中に入るだけで、自分の意思では動けなかった。それで風すっかを連れて来たんだわ」

「ここって、大昔の世界？　またタイムスリップとか？」
「神話の世界そのモノが太古に存在したかは怪しいわ。パラレルワールド、ってところかしら？」
「パラレル…？」
「連綿と流れる、北欧の人々の信仰と共にある世界…。風すっかがホズ神を助けた事によって、私達の世界と繋がった、平行世界…」
「ボク…、助けられなかったよ」
「助けたわよ、だって」
「今日の昼頃、あっちのホズはいきなり回復したんだ」
「……？」
今日の昼って……、こっちのホズが、刑を執行された時間…。
「分かんないや？　何で？」

「童話の展開だと、ただ騙されて、傷ついて、不本意に死罪になっただけだけれど、この世界のホズは、違ったんじゃないの？」
「…ああ、自分から刑場に行った。真っ直ぐ償うって…」
「それ、多分、大きな違いだと思うわ」
そういえばフレイヤもそんな事を言っていた。
「小鳥が来てくれたお陰だって。澱(おり)が落ちたように、スッキリと、元気になったの」
「で、半日体力を貯めてから、僕達をこの世界に送って貰ったの。君を迎えに」
「そうか…」
まだ頭の整理はつかないけれど、自分がこの世界でやった事…、ちょっとは両方のホズの役に立てたらしい。
風すっかは安堵感で力が抜けた。
「さてと…！」
柿ただちゃんが後ろ向きで、地平を眺めたまま言った。
「ちょっと、時間、いいかしら？」
だいちゃんが溜め息を付きながら、懐中時計を取り出した。
「……三十分だけだよ」
「それだけあれば、ひとっ飛びして来られるわ！　『スノッリのエッダ』の世界よ！　あの虹の橋に、ヘイムダルはいるのかしら?!　さっき地上を駆けていたのは『銀のフレイヤ』でしょう？　ね、風すっか、オーディンには逢った？　トールは？　フレイは?!」
振り向いた柿ただちゃんの目は、少女漫画のようにキラキラ輝いていて、完全にミーハースイッチオン状態だ。
「風すっか、風袋借りるね！」
「あ…いいけれど、柿ただちゃん…」
ボクが一番カッコイイと思ったヒト、今の中に入ってなかったんだけれど……。

風すっかの言葉の前半分も聞かない内に、柿ただちゃんは飛び出して行った。
残った二人は暫く、遠くの進軍を眺めていた。
「あ……」
真っ黒な馬に乗って、反対方向に駆ける騎馬がいる。鎧に身を固めているが、細身の体型と、赤みがかった金の髪、何より兜の下の鋭い薄青の眼で、それが誰だか判る。
フレイヤの加勢に行くのだと思ったら、真っ直ぐ世界樹に駆けて来る。

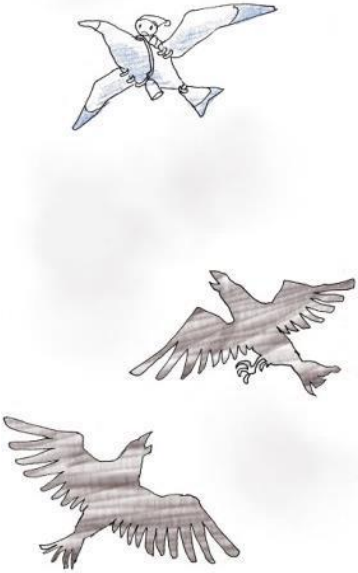
「ロキ…！」
だいちゃんもその騎馬を眺めながら、風すっかの呟きを聞いていた。
「ロキ？　火の神のロキなの？」
「うん」
「僕、エッダは飛ばし読みだったんだけれど…」
「うん？」
「ロキって一番切ないヒトだと思った」
「…？？」
「ロキは、ラグナロクの時、アース神族を見限って巨人族に味方するんだ」
「え…っっっ？」
風すっかは、そればかりは間違いだと思った。確かにロキは『何でもあり』だけれど、それは『最後の一線』じゃないか！
「だって、彼はアース神族だろ？　オーディンの弟で」
「兄弟っていっても、お互いの血を混ぜた兄弟…、義兄弟ってやつ。ロキは、母親が巨人族で、純粋なアース神族じゃない。オーディンに認められてアースガルズにいたけれど」
「……」
ロキが、あの光降り注ぐアースガルズで、かなり浮いていたのが、理解出来た。
「だいちゃん、ボクも、これ、借りるね！」
風すっかは金の鈴の付いたカモメに跨がるが早いか、ヒュウと飛び去った。
残されただいちゃんの所に、枝からラタトスクが降りて来た。

＊＊＊

「ロキ！」
世界樹に通ずる虹の橋の手前で、火の神は振り向いた。
「まだほっつき歩いていたのか」
「どこへ行くの！　オーディンが力を借りに来たんじゃなかったの？」
「…決裂した」
「あんたが感情に任せて行動するとは思えないけれど…。それも折り込み済みなの？」
「奴の出方次第で幾らでも……」
「オーディンがどうとかじゃない！　あんたがどーしたいのか、だ！」
「俺は…、巨人族だ」
「アース神のプライドは？」

「そんなもん、最初(はな)っからねえ!!。俺にあんのは、俺自身のプライドだけだ!!」
「……」
「お前、帰る気がないんなら、フレイヤの側にいろ。あいつを守ってやれ」
「あんた、フレイヤも裏切んのか?」
「フレイヤとは、もう、話は着いている、戦場で対峙したら、闘う約束だ」
そうまでして、ロキ…、何がしたいの…?

「ロキ!　裏切者!」
虹の橋の方で、初めて聞く声がした。
「おいでなすったぜ。お前は退いていろ!」
風すっかは空中で後ずさりしながら、声の方に身構えた。
「裏切られたと悲観する程、あんたは信用してくれていたのか?　ヘイムダル!!」
ヘイムダル…、さっき、柿ただちゃんが羅列した中で一番に来た人物だから、・・そんな予感はした。
予想通り、嫌っンなるほど美形のアース神が、むっちゃ綺麗なパロミノの馬に跨がって、七色の虹の上にいた。
「減らず口を!　貴様が女神フレイヤにしでかした狼藉の数々の罪も、ここでまとめて償わせてくれる!」
あ、……そーゆーコト……。
「おやまあ、男前だねえ」
ロキは右手を振り上げ、空中高く炎を上げる。
「この…出来損ないが!　今まで、大王が目にかけていたゆえ、見逃していたが…!」
映画俳優みたいなイケメン戦士は、芝居がかった台詞を吐きながら、剣を抜いて、火の神に挑み掛かった。
「へえ…!　み・の・が・し・てくれていたんだ!」
ロキも剣を抜こうとした所に、いきなり上空から二羽のカラスがぶつかって来た。不意を突かれたロキは馬から落とされた。
「ちっ!」
「でかした、カラスども!」
怯んだロキに斬り掛かろうとした瞬間、ヘイムダルは横っ腹にカモメの特攻を喰らって、こちらも馬から落ちた。
「ぐう・・!」
「あぁ、それ、効くんだよなぁ」
ロキはその隙に立ち上がった。
風すっかはカラスを引き付けて炎の中を高く飛んだが、風袋



と違って上手く飛べない。たちまち鋭いくちばしに追い付かれそうになって、咄嗟に叫んだ。

「知ってる？　フレイヤって、××××な上に、〇〇と〇〇〇〇〇んだよ〜〜！」

未知の情報にカラスは反応して、主の元に飛び去った。

「お子ちゃまが、言うコトじゃ、ないぜぇ……」

ロキは半笑いだったが、ヘイムダルは顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「フレイヤが…、フレイヤを、どこまで愚弄するかっ?!。・・・貴様アァーー！」

だって、咄嗟に、それしか思いつかなかったんだもん…。

「風すっか！　何やってんの！」

振り向くと、風袋に乗った柿ただちゃんだ。

「ロキは…、そのヒト、アース神の敵なのよ」

風すっかは、少し離れて、落ち着いて言った。友達を失うかもしれない……。

「アース神も、何も、関係ない！　ボクは、ボクの好きなヒトを、助けただけだ！」

柿ただちゃんは真剣な顔でつばを飲み込んで黙った。

ロキは、ちょっとだけ止まって、すぐヘイムダルに向かって行った。
虹の橋で、二人の神の闘いが再開される。
「貴様一人、何をやった所で、アース神に太刀打ち出来ると思うか！」
「隻眼のオッサンか？　今頃俺の息子と一騎討ちの最中さ。馬鹿力のトールも別の息子がお相手している」
「貴様！　次々に化け物を生み出していたのは、この日の為か？」
「そのオツムにはちょっとはモノが詰まっているみたいだな。だが…、俺の息子達は…、化け物じゃねぇ!!」
二人の神は憎しみ合って炎の中に消え、もうよく見えない。
柿ただちゃんが風すっかに近寄った。
「ごめんなさい、この世界にずっといたのは貴方なのに」
「…ううん」
「でも、もう、手出ししちゃ駄目。行きましょう…」
「あ、うん…」
行った方がいいんだろう。柿ただちゃんはこの闘いの結末を知っているんだ…。
二人は激しく燃え上がる闘いの炎を脱け出して、世界樹に向けて飛んだ。
「柿ただちゃん、一個だけ教えて」
「ん？」
「ロキは何であのヒトと闘うの？」
「ヘイムダルは、世界樹とアースガルズを繋ぐ、虹の橋の番人なの。彼を倒せば、巨人族も、炎の巨人も、一気にアースガルズに雪崩れ込める」
「え…それって…」
「そう、それは、アースガルズだけでなく、この世界の全滅…、崩壊を意味するの」
「……ロキ…」
あんたの目指した結末は、この、うんざりした世界の…、『リセット』だったのか…？
眼下の炎の中で、アースに翻弄され続けた火の神が、笑った気がした。
「俺も、お前のコト、ちょっと好きだったぜぇ」

＊＊＊

世界樹に戻った二人が、あまり何も喋らないので、だいちゃ

んも余計な事は聞かなかった。
空が禍々しく渦巻いて、これから起こる災厄をほのめかしている。
「あ、来たよ」
ラタトスクが枝を駆けて来た。風すっかの側に来て、彼を見上げ、小さな椎の実を差し出す。
「…!!、ホズ?!」
「よく分かるね、そう、あっちの世界のホズ。ラタトスクが進んで彼の依り代になってくれたんだ。彼の知識と引き換えに」
ラタトスクはつい最近繋がった、十番目の世界の知識を欲しがっていた。
「これ？　…椎の実？」
「ニーブルヘイムに行って来たらしいよ、君にお土産」
「……ホズ…」
「時間だよ」

三人は金毛のリスを囲んで輪になった。
身体がぐるぐる回る感じがして、また投げ出された。今度はホズの部屋の絨毯の上だ。
「ああ……」

帰って来た…！　長い長い夢を見ていたようだ。顔を上げると、だいちゃんと柿ただちゃんも、起き上がった所だ。
ベッドには感動に満ちた目のホズが、横になったままこちらを見ている。かなりやつれてしまっている。
「…やあ…」
「風すっか、ごめんね、迎えが遅れて…。そんで、有り難う！ホズを助けてくれて、本当に有り難う!!」

母親が沢山の本を抱えて、部屋に入って来た。ホズに負けず劣らずやつれている。
ホント、時間ギリギリだった。もうちょっと遅れていたら、魂の抜けたホズの身体を見られて、もっとやつれさせてしまっただろう。
「誰かいたの？」
「何でもないよ」
「言われていた本、これで全部かしら？　図書館のカードなんて、いつの間に作ったの？」
「うん、友達にね…。ああ、今日はもう休むね」
「…？　お薬、飲むのよ」
「うん、…あ、ありがとう」

母親が出て行ってから、声を殺して話をした。風すっかは、出来るだけ客観的に、あった事だけを話した。
みな、ロキに関しては何も言わなかった。別世の誰が、勝手に彼を批評出来るだろう？　彼の全部を分かるヒトは、誰もいない…。
その夜はみんなホズのベッドに潜り込んで、ぐっすり眠った。夜中に母親が見に来たら、今までにない、暖か気な寝顔をしていた。
翌日、ホズは、椎の実にピンを打ち、金鎖を通してくれた。
「ちっちゃく字が彫ってあるよ」
「何て読むの？」
「『ありがとう、小鳥』…って」
風すっかは大切に懐の中に仕舞った。

「何にも知らないボクよりも、みんな知っている柿ただちゃんが行った方が、要領良く立ち回れたのに」
「まさか！」
柿ただちゃんはカー杯否定した。
「風すっか、本気でそう思ってんの？　物語の結末を知っているヒトがいて、何の役に立てるっていうの？　未来が分からないから、一生懸命考えて、精一杯頑張れるんだわ！　この場合、一番の適任は、やっぱり風すっかだったのよ」
「うーん…」
風すっかは１００％理解していないが、長くなりそうなので曖昧に話を切った。

柿ただちゃんは心からそう思う。エッダは勧善懲悪の世界だ。予めの善悪の刷り込みがあって、風すっかのように自分の感覚で人を信じる事が出来ただろうか？
本の書き方では、ホズは愚か者、フレイヤは奔放で自分勝手、ロキは裏切者の大悪人なのだ。
だいちゃんは今更『エッダ』を熟読している。風すっかの体験談と組み合わせると、すこぶる味わい深いらしい。
風すっかは、勧められたが、やっぱり読む気になれなかった。柿ただちゃんにちょっと聞いただけで、もう胸が支えて駄目だ。
ロキも、オーディンも、トールも、風すっかの中では生き生きと、生身の存在なのだ。
フレイヤは戦死の記述はないが、ラグナロク後の世界には登場しない。牝鹿にでも姿を変え、女神なんて仰々しく敬われないで、気楽に暮らしてるんだろう、…と思う事にした。

ホズは、…毎日が変わった。

相変わらずベッドの生活で世界は狭いけれど、母親や弟に頼んで借りて来て貰った本をひたすら読んでいる。

ラタトスクの知識欲は果てしない。ホズが体調の良い時『あっちの世界』に出向き、ラタトスクに知識を提供する代わりに、世界樹を伝って色んな世界を見せて貰った。

世界は水に沈んでいて、新たな神や人間の出番は、まだ少し先らしい。

金毛のリスがたまにニーブルヘイムの根を伝って小さな神サマの所へ行き、知識を供すると聞いて、自分が何処かの世界の未来にちょっとは役立ててるかと思って嬉しくなる。

大人の歳まで後何年か分からないけれど、それまでそうやって一日を重ねよう…と、少年は思う。

この能力は多分大人になると消える物だ。だから自分は大人にならなくていいんだろう。

本当に、『生まれながらにえこひいきされている者』はそんなにいない。健康で朗らかな弟を妬み、そんな自分に落ち込んだのも、遠い過去。逆に、自分はちょっぴりえこひいきされているんじゃないかとも思う。

母親に何か感謝を現そうと、不器用ながら世界樹の繋ぐ世界の絵を描いたりしている。だから毎日、本当に忙しい。

三人の友達とお別れの日が来ても、そんなだから、ホズは……もうその頃は三人にはラタトスクと呼ばれていたけれど……泣いたりせず、しっかりした目で三人を見送った。

石畳のメインストリート、クランクを曲がって、この物語の主人公は消えた。

〜おしまい〜

二〇〇九・八・某